「手紙文」と「スピーチ」から見た敬語接頭辞「お・ご」を用いた「敬語表現」の使用様相

金　東奎

キーワード
「お・ご」・「改まった場面」・「直接尊重表現」・「間接尊重表現」・「丁寧さ」

1. 問題提起

日本語を用いたコミュニケーションにおいて、「待遇表現（中でも「敬語表現」）」は、人間関係を適切なものとするために必要不可欠な要素である。その「敬語表現」の形式のなかで、質的にも量的にも中核をなしているのが敬語接頭辞「お・ご（御）」（以下「お・ご」）を用いた「敬語表現」である。しかし、「お・ご」を用いた「敬語」と「敬語表現」に関しては、日本語母語話者の使用が必ずしも一定だとは言えないため、日本語の事実（現状）をどのように捉えるかという点や、日本語教育・学習においてどのように扱うかといった点などが問題になっている。

特にそのなかで、「改まった場面」[1]における「敬語表現」についての考察は、日本語の使用実態および日本語教育における重要な項目になると思われる。先行研究においても記述が試みられているが、その使用様相に関する考察は、十分とは言えないであろう。「お・ご」を用いた「敬語表現」に関しては今まで多数の研究が行われてきたが、「お・ご」の付け方や「語・文」レベルでの使用様相に集中した研究が多かったため、実際の使用の場面―「文話レベル」[2]における使用様相については明らかにされていない点があると思われる。

そこで、本稿では、実際の使用場面―「改まった場面」における「お・ご」を用いた「敬語表現」の使用様相について考察するため、日本語を用いたコミュニケーションの模範例として存在し、「お・ご」を用いた「敬語表現」が比較的多く使われる「手紙文文例集」と「スピーチ用例集」をテキストとして用いた。「お・ご」を用いた「敬語表現」の一部に対する分析、考察ではあるが、その使用様相を窺うことができると思われる。

2. 敬語接頭辞「お・ご」

2.1. 敬語接頭辞「お・ご」

2.1.1. 「お」

辻村（1991）によると、「お」は尊敬・謙譲・美化の接頭辞であり、「おほみ」→「おほむ（ん）」→「おん」→「お・おん」→「お」のように転移してきたとしている。「お」は、本来、尊敬の接頭辞であるが、女房詞から、丁寧の接頭辞としても使われるようになった。また、話し手側の物事であっても、それが及ぶ相手に敬意を表す場合には謙譲語としての用法もある。接続の面においては、体言に付くが、用言にも付くようになった。また、和語に付くのが一般的であるが、漢語・字音語でも「お」の付くものがあって、外来語に付くこともあるとしている。

2.1.2. 「ご」

辻村（1991）によると、「ご」は尊敬・謙譲・美化の接頭辞であり、本来、中国語起源敬語接頭語であるとしている。基本的には、漢語に付くが、まれに和語に接続することがあるとしている。また、意味、用法の面においては「お」と共通する部分もあるが、「お」が物事を「きれいに・やさしく」表現するに対し、「ご」は「立派に」表現するという性質がある。

2.1.3. 「おん」「み」「ぎょ」

テキストにおいては、その使用例は少ないが、「御」の他の使用として「おん」「み」「ぎょ」がある。しかし、その使用例はごく限られたことばでしか確認できない。したがって、本稿においては「お・ご」の使用を中心として分析、考察を行った。

2.2. 敬語接頭辞「お・ご」の先行研究

「お・ご」を用いた「敬語表現」に関しては、今まで多数の研究が行われてきた。柴田（1957）は『日本語アクセント辞典』から系統的無作為抽出法によって得た4830語に対し、接頭辞「お」を付けておかしい場合には×、おかしくない場合には○を記入してもらい、その結果を集計・分析した。田中（1972）は国立国語研究所の「新聞の語彙調査」の資料についての調査、分析した。菊地（1994）は「先生にお手紙をさしあげた」という言い方をどのように思うかについてアンケート調査を実施した。上に提示した研究以外にも数多くの先行研究があるが、ほとんどが「語・文」レベルにおける「お・ご」の付き方に関する研究である。本稿では「語」レベルにおける「お・ご」の付き方の研究にとどまらず、実際使われている単位として考えられる「文話」を視野に入れ、「お・ご」の使用様相やその「敬語表現」の「表現」「理解」について考察する。

特に、「お・ご」を用いた「直接尊重表現」「間接尊重表現」の使用について分析・考察を行なうが、「尊重」（「直接尊重」「間接尊重」）の概念・用語は浦谷・川口・坂本（1998）から取り入れたものである。浦谷・川口・坂本は「尊重」の概念について次のように述べている。

（「おっしゃる」「お書きになる」などは）…ある人物を〈高くする〉という「敬語

的性質」を持ち、そうした「敬語的機能」を果たす、という点で最も「敬語らしい敬語」と言えるかもしれません。その意味で「尊敬語」という名称でもよいのですが、現在の「敬語表現」においては、「尊敬」という言葉が必ずしも適切でない場合も多いため、「尊敬」ではなく、すべての人の人格を「尊重」するという意味で、「尊重語」という術語で呼びたいと思います。

現代社会においては「尊敬」という術語よりは、すべての人の人格を「尊重」する意味の「尊重語」という術語が最も適切であると考えられる。さらに、蒲谷・川口・坂本(1998) によると、「敬語」の概念の部分に「直接」関る動作主体を「高くする」という「敬語的性質・機能」を持っている表現を「直接尊重語」(従来の分類では「尊敬語」にあたる)、概念の部分に直接関る動作主体は「高くしないで」、その動作に間接的に関る人物を「高くする」という「敬語的性質・機能」がある表現を「間接尊重語」(従来の分類では「謙譲語」にあたる) と、位置付けている。

なお、本稿においては、分析・考察の対象は必ずしも「語」レベルで切り取るのではなく、「お・ご」の「敬語表現」という点を重視し、やや広めに切り取っている。

3. 調査対象

3.1. 「手紙文」

3.1.1. 「手紙文」の定義

本稿においては「手紙文」のことを、一定の書式 (たとえば、前文、本文、末文、後付、副文で構成され、前文には起首、時候の挨拶、安否の挨拶などを入れ、末文には結びの挨拶、結語などを入れてはじめて完成されるという書式) によって書かれた「文章」だけでなく、特別な形式のない略式の手紙、はがきやメモなども含めて考える。コミュニケーションのために (一定の「表現意図」を叶えるために) 一定の「相手」に向かって書かれたものを「手紙文」として考える[3]。

3.1.2. 「手紙文」「手紙文文例集」の性質・特徴

「手紙文」は、他の「文章表現」とは違って「相手」との関係が明確であるという特徴がある。「相手」との関係が明確であるため、「相手」が「自分」より上位者である場合はそれに従って「敬語表現」が多用される。また、「手紙文」という「文章表現」の性質上、「相手」が必ずしも上位者ではなくとも「丁寧に」表現するようになるという特徴もある。「手紙文」において「お・ご」を用いた「敬語表現」が多用される点は上記のような特徴に起因していると考えられる。

「手紙文文例集」は「手紙文」を集めたもので、「手紙文」における「表現」「理解」の模範例としての性質を持っていると考える。

3.1.3. 「手紙文文例集」の種類

本稿においては以下のような市販の「手紙文文例集」からの「手紙文」をテキストとして用いた。「手紙文文例集」選定の際、現代日本語の使用事実にできるだけ接近するため、1990年以降に出版されたものを選んだ。また、著者、編者の言語的な「癖」による影響

を最小にするため、複数の「手紙文文例集」を用いた。

○現代文書研究会編（1990）『そのまま使える手紙の書き方全書』池田書店（「そのまま」と略称。以下、同様）

○輪辻潔（1997）『すぐに役立つ大活字BOOK's　わかっているようでわからない手紙の書き方』三省堂出版社（「大活字」）

○木庭久美子（1999）『すぐ書ける　お礼の手紙・はがきの手帳』小学館（「お礼」）

○講談社編（2001）『あいさつ・スピーチと手紙の事典』講談社（「あいさつ」）

○主婦の友社編（2001）『CD－ROM付　手紙・はがき・文書文例大事典』主婦の友社（「CD」）

以上の「手紙文文例集」5冊から500例の「手紙文」を調査対象とした。

3.2.　「スピーチ」

3.2.1.　「スピーチ」の定義

本稿においては「スピーチ」のことを、一定の形式に従って行われる「談話」だけでなく一定の形式がなくても[1]、式辞、祝辞、冠婚葬祭や各種の集会におけるあいさつなど、「改まった場面」において、コミュニケーションのために（「表現意図」を叶えるために）一定の「相手」に向かって発せられたものとして考える。また、「スピーチ」は「手紙文」と違って、「音」「音声」をその「表現形態」としているが、本稿においては、「音」「音声」によるコミュニケーション上の働きや影響について考察するのではなく、「スピーチ」における「敬語表現」を主な考察対象としているため、音声化する前の段階である「スピーチ」の原稿を研究対象とする[2]。

3.2.2.　「スピーチ」「スピーチ用例集」の性質、特徴

「手紙文」は「相手」との「人間関係」を考え、「丁寧に」表現するという特徴があるが、「スピーチ」は「相手（聞き手）」との「人間関係」だけでなく、「場」を考え、「丁寧に」、「改まった」表現をするという特徴がある。「スピーチ」の場合、「手紙文」と違って、不特定多数の「相手」を持つ場合が多い。

また、「スピーチ」は形式的には「談話」の形をとっているが、普段の日常生活ではあまり使わない「敬語表現」や構成という特徴を持っていると考えられる。それは上において確認したように、「スピーチ」がある程度、特別な使用の「場面」で使われているからだと考えられる。そのような面から考えると、「スピーチ」は「文章」に近い、「文章表現」的な性質を持った「談話表現」であると言えよう。

「スピーチ用例集」は「スピーチ」を集めたもので、「スピーチ」における「表現」「理解」の模範例としての性質を持っていると考える。

3.2.3.　「スピーチ用例集」の種類

本稿においては以下のような市販の「スピーチ用例集」からの「スピーチ」をテキストとして用いた。「スピーチ」選定においては、「手紙文」と同じ点を考慮した。

○永田書店編集部（1995）『すぐに使える　式辞・あいさつ実例百科』永田書店（「式辞」）

○藤村英和（1998）『葬儀・法要のあいさつ』西東社（「葬儀」）
○ブライダルスピーチ研究会（1998）『新郎・新婦のスピーチ実例集』日本文芸社（「新郎」）
○講談社編（2001）『あいさつ・スピーチと手紙の事典』講談社（「あいさつ」）
○成美堂編集部（2001）『短いスピーチ大事典1000』成美社（「大事典」）
以上の「スピーチ用例集」5冊から500用例の「スピーチ」を調査対象とした。

3.3. テキストの意義

本稿は「改まった場面」における「お・ご」を用いた「敬語表現」の使用様相を主な分析・考察の対象としている。

「手紙文」「スピーチ」は、「改まった媒体」（「手紙文」）、「改まった場」（「スピーチ」）における「敬語表現」という性質を持っていると考えられる。「手紙文」「スピーチ」はコミュニケーションの「主体」がその「媒体」「場」を（「媒体」と「場」を総合して「場面」）「改まったもの」として認識しているという共通点があり、また「手紙文」—「文章表現」、「スピーチ」—「談話表現」という性質を持っているので、本稿において目指している「改まった場面」—「改まった文話」における「お・ご」を用いた「敬語表現」の使用様相に接近しやすいと思われる。

本稿は「改まった文話」に対しての部分的な分析、考察となるが、「改まった場面」における「お・ご」を用いた「敬語表現」の使用様相を探るひとつの試みとなると考えられる。

3.4. 分析の方法

5冊の「手紙文文例集」と5冊の「スピーチ用例集」から500例ずつ収集した1000例の「手紙文」と「スピーチ」を資料として扱った。

「お・ご」を用いた「敬語表現」の判定や数値は次のような方法によるものである。以下は「手紙文」の用例である。「スピーチ」においても同様な方法を適用した。

【用例1「手紙文」】
「表現主体」：結婚祝いをもらった夫婦（杉村夫婦）
「表現主体」の「表現意図」：上司からの結婚祝いへのお礼
「理解主体」：結婚祝いをくれた上司（高山）[6]

拝啓
秋たけなわの候、皆様にはいよいよご清祥のことと、およろこびもうしあげます。
このたび、私どもの結婚に際しましては、ごていねいなご祝辞ならびに結構なお品までちょうだいいたしまして、ありがとうございました。
お贈りいただきました美しいペアのワイングラスは、さすがにご趣味豊かな高山様ご夫妻のお人柄をしのばせるものと、感激しております。終生、私どもの記念品として大切に使わせていただきます。
未熟な二人ではございますが、ご祝辞いただきましたお言葉をひとつひとつかみしめ

ながら、心温まる家庭をつくっていきたいと思っています。今後とも変わらぬ ご指導 のほど、 お願い申し上げます 。

改めて ごあいさつ に参上するつもりでおりますが、とりあえず書面にて 御礼申し上げます 。

敬具

十月五日

杉村　実

絵里

高山　義雄様

(「お礼」、p. 59)

ご趣味 のように［　　］に入っている表現が「直接尊重表現」、 お贈りいただきました のように［　　］に入っている表現が「間接尊重表現」を表している。「表現」の分類においては「文話」における「人間関係」「内容」「方向性」「待遇意識」などの観点から総合的に考えて判断した。

例えば、 ご趣味 という表現は、この「手紙文」においての「相手」である高山に属している。尊重して表現しようとする「相手」に属している物事に対して「お・ご」を付けて「敬語化」―「敬語表現」として使っている。「敬語」の概念の部分に「直接」関る動作主体を「高くする」という「敬語的性質」を持っているため、「直接尊重表現」として判断した。 お贈りいただきました は概念の部分に直接関る動作主体は「高くしない」で、その動作に間接的に関る人物を「高くする」という「敬語的性質」や「敬語的機能」があると考えられるため、「間接尊重表現」として判断した。

4.「改まった媒体」および「改まった場」における「お・ご」を用いた「敬語表現」の分析・考察 1 ―「手紙文」「スピーチ」の「お・ご」を用いた「敬語表現」の使用における共通点

4.1.　全体の構成に関する分析・考察

「手紙文」「スピーチ」という「文話」の全体の構成という観点から、「お・ご」を用いた「敬語表現」の使用様相を分析した結果、「お・ご」を用いた「敬語表現」は「文話」―「手紙文」「スピーチ」において「相手」との関りがあると認定できる部分に使われるということがわかった。特に、最初と最後の（形式的）あいさつ、お礼の部分に多く用いられている場合が多かった。

以下は、「お・ご」を用いた「敬語表現」が、「相手」との関りのある部分、特に、最初と最後の（形式的）あいさつ、お礼の部分に用いられている用例である。

【用例2「手紙文」】

「表現主体」：小学校に入学した子供の両親（豊田）

「表現主体」の「表現意図」：次男健次郎の小学校入学祝いへのお礼

「理解主体」：小学校入学祝いを贈ってくれた目上の人物（秋山）

拝啓

桜前線北上の便りも聞かれるころとなりました。

皆様には、お元気でお過ごしのことと、およろこび申し上げます。

このたびは、次男健次郎の小学校入学に際し、お心こもるお手紙に、お祝いの文具券までいただきまして、まことにありがとうございました。

さっそく、ちょうだいした文具券で、筆箱やノートなどの学用品を求めさせていただきました。健次郎は大喜びで、机から出したりしまったりして眺めております。

おかげさまで、ついこの間生まれたように思っておりましたのに、もう小学生でございます。昨日も姉の恵子に小学校の様子などいろいろ質問したりして、入学式を待ちかねております。なにぶんにものんびり育てておりますので、親としては多少不安もございますが、なんとかがんばってほしいと願っております。

近いうちに子供たちを連れまして、お礼かたがたうかがわせていただきたいと存じております。

末筆ながら、奥様にもどうぞよろしくお伝えください。

花どきのならいでとかく気候不順の折から、おからだにはくれぐれもお気をつけください。

まずは、お礼のみにて失礼いたします。

敬具

三月二十四日

豊田　修

陽子

秋山清一　様

(「お礼」、p.46)

【用例3「スピーチ」】

「表現主体」：新婦の母親

「表現主体」の「表現意図」：結婚披露宴の客にあいさつをする

「理解主体」：結婚披露宴の客

「場」：結婚披露宴場。不特定、複数の「相手」が集まっている

皆さま、私は新婦の母、伊藤幸枝でございます。本日は田中俊夫、和枝の結婚披露宴の宴にお集まりいただきまして、ほんとうにありがとうございます。

ご存じのように、新郎は早くご両親を亡くされ、新婦の父もあいにく病床にありますので、私が両家を代表して、ひと言お礼を申し上げたいと存じます。

本日は二人の門出をこのように盛大にお祝いくださいましたうえ、ご厚情あふれるお言葉の数々をちょうだいいたしまして、まことにありがとうございます。

ご存じのとおり、二人ともふつつか者でございます。今後とも皆さまのご指導をたまわりますよう、お願い申し上げます。

なお、新婦の父は、昨日までなんとか皆さまにごあいさつだけでも申し上げるつもりでいたのでございますが、どうしてもまいることができず、皆さまにお詫び申し上げる

ように申しておりました。よろしくご理解くださいますよう、併せてお願い申し上げる次第でございます。

(「式辞」、pp. 118-119)

【用例2,3】は主に「相手」との関りのある部分に「お・ご」が使われている用例である。「手紙文」「スピーチ」という「文話」自体が「相手」との関りがあって初めて成立するという性質を持っているが、そのなかには、(形式的) あいさつや、お礼の部分のように「相手」と密接な関係のある部分と「自分」の計画、抱負などを述べる部分のように「相手」との関係の認定が難しい部分がある。そのなかでも「お・ご」を用いた「敬語表現」は「手紙文」「スピーチ」ともに「相手」との関りのある部分に多く使われる傾向がある。

もちろん、他の「敬語形式」(例えば、「レル」「ラレル」など) の使用においても同様の点—主に「相手」との関りのある部分において使用されるという点が確認できるが、「手紙文」「スピーチ」のような「改まった文話」における「敬語形式」の使用の面から分析した結果、他の「敬語形式」より「お・ご」を用いた「敬語形式」の使用が多いという点が確認できた。特に、(形式的) あいさつ、お礼の部分、つまり比較的固定した性質を持っている部分において「お・ご」を用いた「敬語表現」を用いて表現していることが確認できたが、それは、他の「敬語形式」と比べて「お・ご」を使った「敬語形式」のほうが「敬意度 (あるいは待遇度)」が高いという点が働いたからではないだろうか。「お・ご」を用いた「敬語表現」は他の「敬語表現」に比べて「敬意度」が高いため、決められた表現であり、「質の高い敬語表現」が要求される部分である (形式的な) あいさつやお礼を述べるの部分などによく使われると考えられる。また、このような現状は「文章」「談話」といった異なる「媒体」の性質より、「お・ご」を用いた「敬語表現」の性質、つまり、形式的である点、「改まり度」が比較的高い点、「固い感覚」を持っている点、「敬意度」が高いといった点などが働いた結果であるとも考えられる。

「相手」との関りのある部分については「丁寧に」表現しようとする意識が働いた結果、「お・ご」を用いた「敬語表現」を多用するようになったと考えられる。

4.2. 「表現形式」に関する分析・考察

4.2.1. 名詞の「直接尊重表現」および動詞の「間接尊重表現」としての使用様相に関する分析

「手紙文」「スピーチ」における「お・ご」を用いた「敬語表現」は次のような「表現形式」で現れていた。

お・ご名詞：直接尊重表現 (+)[6] お・ご動詞：間接尊重表現

以下は「手紙文」「スピーチ」からの表現例である。

【「手紙文」】

(1) 師走の折、貴社のますますのご発展をお祈り申し上げ、心より御礼申し上げます。(「お礼」、p. 96)

(2) そこで先輩、そして奥さまのお力をお借りしたいのですが、先輩の会社は女性が半分以上と聞いております。(「大活字」、p. 83)

(3) 何か支障がおきましては ご迷惑 を おかけする ことになると思います。せっかくのお言葉ですが、…（「大活字」、p. 120）

(4) 先般はゴルフの お誘い を お受けしながら、家業に追われて ご辞退申し上げ、失礼いたしました。（「そのまま」、p. 172）

(5) つきましては、先生の お力 を おかしいただきたい のですが、この身勝手なお願いをお容れいただけませんでしょうか。（「そのまま」、p. 184）

(6) また、スピーチの ご指名 を受けておりましたが、そちらに関しても ご迷惑 を おかけする ことになり、まことに心苦しく存じます。（「CD」、p. 338）

【「スピーチ」】

(7) なにしろ北海道は初めての経験ですので、皆さんの お力 を お借りしたり、お知恵 を お借りしたり しなければならないことも多いことでしょう。（「式辞」、p. 394）

(8) どうかこれまで同様、ふたりに ご指導 と お力添え を お願いします。（「新郎」、p. 159）

(9) 本日は皆様、ご多用 のところを お集まりいただき、まことにありがとうございます。（「あいさつ」、p. 170）

(10) 田畑さん、これを機に今後いっそうの ご精進 を お祈りする とともに、いつまでもご壮健で、そしてＡ町柚の伝統を継承する後進への ご指導 と育成を重ねて お願い申し上げます。（「あいさつ」、p. 217）

(11) どうか生前の故人に お寄せいただきました ご厚誼、ご厚情 を今後も変わらずご遺族の方々に賜りますよう、切にお願い申し上げます。（「葬儀」、p. 87）

資料として用いた「手紙文文例集」の用例、500用例を対象として調べた結果、次のような事が確認できた。

【表1】「手紙文」における「直接尊重表現」と「間接尊重表現」の品詞別使用様相

「手紙文」	「直接尊重表現」	「間接尊重表現」
名詞	１７６３[9]（８２．８９％）	４３２（２８．００％）
動詞	３６４（１７．１１％）	１１１１（７２．００％）
計	２１２７（１００．００％）	１５４３（１００．００％）

【表1】は500用例の「手紙文」の中の「敬語表現」を調べた結果である。

名詞に「お・ご」を付けて「直接尊重表現」として使用している例の数が1763例（「直接尊重表現」全体の82.89％）、動詞に「お・ご―いただく」「お・ご―申し上げる」などの形式を用いて「間接尊重表現」として使用している例の数が1111例（「間接尊重表現」全体の72.00％）があった。これは、「手紙文」において「お・ご」を用いた「敬語表現」が、名詞には「直接尊重表現」として、動詞には「間接尊重表現」として使われる傾向が存在しているということを示していると考えられる。

次は「スピーチ」の用例500における分析結果であるが、「手紙文」と同様、「お・ご」を用いた「敬語表現」が、名詞には「直接尊重表現」として（85.74％）、動詞には「間接尊重表現」として（75.79％）使われる傾向を示していることが確認できる。

【表2】「スピーチ」における「直接尊重表現」と「間接尊重表現」の品詞別使用様相

「スピーチ」	「直接尊重表現」	「間接尊重表現」
名詞	２０６８（８５．７４％）	３２３（２４．２１％）
動詞	３４４（１４．２６％）	１０１１（７５．７９％）
計	２４１２（１００．００％）	１３３４（１００．００％）

「手紙文」と「スピーチ」という「媒体」の異なる「文話」においても、「お・ご」を用いた「敬語表現」が名詞には「直接尊重表現」として、動詞には「間接尊重表現」として使用されていることは、「改まった場面」における「お・ご」を用いた「敬語表現」の使用様相には共通する点があるからであろう。以下においては、その使用様相における共通する認識について考察した。

4.2.2. 動詞の「間接尊重表現」としての使用様相に関する考察

【「手紙文」】

(12) その折の感想などを、十一月三十日までに四百字詰原稿用紙十枚前後に おまとめいただければ 幸いでございます。(「そのまま」、pp. 167-168)

(13) なお、さらに お許しいただければ、帯、小物、草履、バッグも含め、一式借用できたらと存じます。ほんとうに厚かましいのですが、お聞き届けいただけます よう、お願い申し上げます。(CD、p. 259)

(14) どうぞお気軽に お越しいただき、ご歓談いただければ、両人にとってもこのうえない喜びとなることと存じます。(「あいさつ」、p. 481)

【「スピーチ」】

(15) 季節のおりにでも、お立ち寄りいただける と、故人も喜ぶと思います。(「葬儀」、p. 133)

(16) 本日はお忙しいなかを ご無理いただき、A市都市防災課長の秋山様にアドバイザーとして ご出席いただいております。(「あいさつ」、p. 266)

(17) 行き届かぬところがございましたら、どうか お許しいただきたい と存じます。(「式辞」、p. 112)

「間接尊重表現」は、その表現自体の性質上、「自分」の行為が「相手」に関係・影響のない場合は成立しない。それで、「自分」の行為が「相手」に関係する動作を表現している動詞に対し、敬語化して表現することによって「丁寧さ」を確保していると考えられる。

「行動展開表現」における「丁寧さ」の原理の一つとして、「自分」が「行動」するというのがある[10]。「相手」を動かすのではなく「自分」が「行動」することによって「丁寧さ」を確保するのである。これには実際に「自分」が「行動」する場合もあるが、実際に「行動」するのは（「行動」してもらうのは）「相手」であっても、表現上の工夫によって—たとえば、「お・ご—いただく」のような「間接尊重表現」を作る形式を使うことによって、「自分」が行動するかのように表現する場合もある[11]。つまり、「自分」が「行動」するかのように表現することによって、また、そのような「行動」が「相手」に関係する「間接尊重表現」を敬語化の手段として使うことによって「手紙文」「スピーチ」における

「丁寧さ」を確保しているのである。

さらに、他の「敬語形式」ではなく、「お・ご」を用いた「間接尊重表現」で表現されているが、それは、「お・ご」が持っている性質—他の「敬語表現」に比べて比較的「敬度」が高い点や、「(—) いただく」「(—) 申し上げる」が持っている「自分」の「行動」や「自分」に対しての「利益」をほのめかすような感覚があるという点が、「手紙文」「スピーチ」の「敬語表現」として働いた結果であると考えられる。

動詞に「お・ご—いただく」などの「間接尊重表現」を用いることによって、実際は「相手」の「行動」であるが、それがあたかも「自分」の「行動」のように表現することにより、「改まった場面」における「文話」—「手紙文」「スピーチ」においての「丁寧さ」を確保しているのであろう。

4.2.3. 名詞の「直接尊重表現」としての使用様相に関する考察

名詞に「お・ご」を付けて「直接尊重表現」を作るのは、「相手」に属する物事に「お・ご」を付けてその「相手」に対しての「尊重」の意識を表現するという性質に適った「敬語表現」である。そのなかで、本稿において注目したのは、「動詞の連用形—名詞化させた表現」に「お・ご」を付けた「直接尊重表現」がよく使われているという点と動作・行為・状態を動詞でなく名詞で表し、それに「お・ご」を付けた「直接尊重表現」がよく使われるという点の2点である。

次は「手紙文文例集」「スピーチ用例集」からの表現例である。共通する表現の一部を【表3】としてまとめた。

【表3】 「手紙文」と「スピーチ」における名詞の「直接尊重表現」

表現	「手紙文」	「スピーチ」
「お誘い」	先般はゴルフのお誘いをお受けしながら、家業におわれてご辞退申し上げ、失礼しました。(「そのまま」、p.172)	エクササイズのあとのビールのお誘いもお忘れなく。(「新郎」、p.74)
「お持ち」	名古屋支店は、卓抜した行動力と的確な判断力をお持ちの山岡様には、最適の職場かと存じます。(「そのまま」、p.96)	山下君は辛抱強い研究者であると同時に、統率力にも非凡な資質をお持ちでした。(「式辞」、p.275)
「お住まい」	以前、ご友人がペナンにお住まいと伺いましたが、その方をご紹介していただけませんか。(「CD」、p.255)	より暮らしやすい環境の団地に、またお住まいの皆様方々の親睦がいま以上に深まるよう、微力ながらも精一杯努力をいたします。(「あいさつ」、p.264)
「お許し」(「おゆるし」)	どうぞ万事おゆるしのうえ、本年も旧に倍してご好誼のほど、ひたすらお願い申し上げます。(「実用」、p.28)	どうかお許しを願います。(「あいさつ」、p.218)
「おあり」	いずれ、当地の△△デパートで個展を開かれる予定もおありとのこと。(「そのまま」、p.102)	皆さんにも、それぞれの懐かしい思い出がおありだと思います。(「式辞」、p.533)

「お忘れ」(「おわすれ」)	もしやおわすれではないかと存じ、ご通知申し上げます。(「あいさつ」、p.503)	エクササイズのあとのビールのお誘いもお忘れなく。(「新郎」、p.74)
「お越し」 「おいで」	なお、左記の住所に新居を構えましたので、お近くへお越しの節はぜひお立ちよりください。(「CD」、p.146) こちらにおいでの節はお立ち寄りくださいませ。(「実用」、p.30)	本日お越しの吉田先生のおかげです。(「大事典」、p.74) 故人も、皆さまのおいでをさぞかし喜んでいることと存じます。(「葬儀」、p 30)
「お勤め」(「おつとめ」)	つきましては、伯父様がお勤めのFテレビに就職ができたらと思い、採用試験に加わっていただきたく、お願い申し上げる次第です。(「あいさつ」、p.487)	園部さつきさんは、外資系のB株式会社に通訳としてお勤めでいらっしゃいます。(「あいさつ」、p 182)
「お力添え」	これも、ひとえに部長はじめ職場の皆様のお力添えがあったからこそと、深く感謝いたしております。(「お礼」、p.118)	皆さまには、生前賜りましたお力添えとご厚誼にあらためて感謝いたします。(「葬儀」、p 34)
「お喜び」	お兄さんもお義姉さんも、さぞお喜びのことでしょう。(「そのまま」、p.93)	ご主人もさぞお喜びのことと思います。(「式辞」、pp.187-188)

【表3】は、「相手」の動作・状態を表現する際、動詞を使うのではなく—動詞に「お・ご」を付けた「お・ご—になる」「お・ご—くださる」などの形式を使うのではなく、その動作・状態を表現する動詞の連用形を用いて、名詞化させ、あるいは名詞で表現して、それに「お・ご」を付けた形の表現を使っている例である。

【表3】で確認できるが、「誘う」の場合、「お誘いくださる」や「お誘いいただく」などのような動詞をそのまま用いた表現ではなく、「お誘い」という名詞化された表現を使っている。「誘い」という表現に「お」を付けて表現することによって、「相手」の「誘い」ということを表し、さらに、その「誘い」は「自分」が尊重する「相手」の「行動」—「誘い」である点を表現している。

同様の観点から考えると、「お持ち」は「持っていらっしゃる」、「お住まい」は「住んでいらっしゃる、生活していらっしゃる」、「おあり」は「いらっしゃる（ある）」、「お越し、おいで」は「いらっしゃる（来る）」、「お勤め」は「勤めていらっしゃる」、「お力添え」は「お力添えくださる」などの代わりに使われていると考えられる。

さらに、これは動詞の連用形だけでなく、名詞で表現している例もある。

【「手紙文」】

(18) 次回ご来店の際にお持ちいただきますと、謝礼といたしまして、千円相当の当店商品券とお引き換えいたしますので、どうぞよろしくお願い申しあげます。(「CD」、p. 265)

(19) つきましては、安全な指導と健康管理のため、お子さまの心身状態を伺う調査票のご記入をお願い申しあげます。(「CD」、p. 267)

(20) 急場のお役に立てず、ふがいな兄だと思うでしょうが、どうか悪しからずご容赦をお願いいたします。(「あいさつ」、p. 517)

(21) 日ごろは、当会の活動に ご理解 ご協力 を賜り、まことにありがとうございます。(「あいさつ」、p. 476)

(22) 今後ともよろしく ご指導 ご鞭撻 を賜りますようお願い申し上げます。(「お礼」、p. 62)

【「スピーチ」】

(23) 皆さまの ご来店 をお待ちしております。(「式辞」、p. 445)

(24) ご承知 のように、営業部では毎年、部としての目標のほか、各自がその年の目標を自己申告することになっています。(「式辞」p. 341)

(25) 皆さま方のかわらぬ ご指導 、 ご厚誼 を心からお願い申し上げます。(「あいさつ」、p. 343)

(26) 本日は ご出席 、ありがとうございました。(「新郎」、p. 215)

(27) 保護者の皆さまの ご支援 もよろしくお願いいたします。(「大事典」、p. 125)

動詞の連用形—名詞化した表現と同様に解釈すると、例えば、「ご容赦」の場合、「ご容赦くださる」「ご容赦いただく」あるいは「お許しくださる」「お許しいただく」のような動詞の概念を残した表現ではなく、「容赦」という名詞に「ご」を付けた「ご容赦」という表現を使っていることが確認できる。「ご容赦」という表現を用いることによって、その「容赦（許し）」は「自分」が尊重する「相手」からの「容赦」であり、それに対して「丁寧に」表現している。

名詞に「ご」を付けた表現を動詞の連用形に「お」を付けた表現と同様に考えると、「ご来店」は「店にいらっしゃる」「店に来てくださる」、「ご理解」は「ご理解くださる」「理解してくださる」、「ご承知」は「知っていらっしゃる」、「ご指導」は「ご指導くださる」「指導してくださる」、「ご出席」は「出席してくださる」「出席していただく」などの代わりに使われていると言えよう。

ただし、このような表現は全ての「手紙文」「スピーチ」において使われているのでもなく、全ての「お・ご」を用いた「敬語表現」に使われているのでもない。「手紙文」「スピーチ」における「お・ご」を用いた「敬語表現」の一部として、「敬語表現」における一つの工夫として使われているのである。

しかし、上で確認した表現が「手紙文」「スピーチ」で頻繁に使われているのは事実である。動詞のままでも表現できる事柄について、それをあえて名詞化した形に「お・ご」を付けた表現が使われているのはなぜだろうか。

使用の意識として、「尊重」すべき人物に関する物事・動作・状態などに対しては、それを直接的に—動詞を用いた動作・行動・状態の「描写」で—表現するのでなく、間接的に—動詞の連用形、名詞化した形で、あるいは名詞で—表現するのが「丁寧」であるという意識が働いているのではないだろうか[12]。白（1996）によると、「一般的に上位者に関する行為を叙述するには、直接的な表現より間接的で迂回した表現をする必要がある」としている[13]。その「迂回的な表現」[14]の一つとして、「尊重」する「相手」の動作・行為・状態を、そのまま動詞—「お・ご」を用いた「お・ご—になる」などの「動詞の敬語化」で表現するのではなく、「迂回的に」それを名詞化（連用形を用いることによって名詞化）したり、名詞にしたりして表現するのではないかと考えられる。

つまり、動詞の連用形や名詞に「お・ご」を付けた「敬語表現」には、「相手」の動作・行動および状態は「—する（動作、動詞）」ではなく、「相手」自身が動いてから展開されるのでなく、「相手」が「動いてなくても、動かなくても」そうなっているという待遇に関しての配慮を表そうとする意識が働いているのではないだろうか。「相手（あなた）」は偉いから、別に行動しなくてもそうなっているという待遇に関しての表現上の配慮が働いているのではないかとも考えられる。「相手」を「尊重」し、「高くする」ということは、「相手」の持っている能力・力などを拡大して表現するという「敬語化」「待遇」の根本的な性質や配慮の表し方の面から考えると、動詞を使わずに、動詞の連用形—名詞化した表現、あるいは名詞に「お・ご」を付けた表現の使用の一部が説明できるようになるのであろう。動詞を直接に用いるのでなく、動詞の連用形—名詞化した表現、あるいは名詞を用いることによって、「尊重」する、「高く」する「相手」の行為・動作・状態を「迂回」して表現する効果もあると思われる。

また、その使用の意識には動詞の連用形—名詞化した表現、あるいは名詞は、比較的簡単な形で敬語化することができる、「お・ご—になる」「お・ご—くださる」を用いた複雑な形式に比べてすっきりした表現を作ることができるという点、洗練された書き方のように感じられる[15]という点なども働いているのではないだろうか。「お・ご—になる」「お・ご—くださる」のような複雑で、使用に関しての制約の多い[16]表現形式を使うよりは、動詞の連用形—名詞化した表現、あるいは名詞に「お・ご」を付ければ良いという比較的「簡単な」形式を使ったほうが良い、あるいは便利だという意識も働いているのであろう。そのような「お・ご」を用いた「敬語表現」に対する意識が「改まった場面」における「文話」－「手紙文」「スピーチ」に反映されていると考えられる。

4.2.4. 「表現形式」における傾向—名詞における「直接尊重表現」と動詞における「間接尊重表現」の使用

分析、考察の結果、「改まった場面」で使われる「お・ご」を用いた「敬語表現」の使用様相の傾向として、次のような「敬語文」が多数存在していることが確認できた。

お・ご名詞：「直接尊重表現」—「相手」の物事・動作・状態に対して「敬語化」する。「相手」の行為を迂回的に表現する。（＋）お・ご動詞：「間接尊重表現」—「相手」に関係する「自分」の動作を「敬語化」する。「相手」を動かさないような表現をする。

5.「改まった媒体」および「改まった場」における「お・ご」を用いた「敬語表現」の分析・考察II—「手紙文」「スピーチ」の「お・ご」を用いた「敬語表現」の使用における相違点

5.1. 「直接尊重表現」の使用様相に関する分析・考察—「スピーチ」における「直接尊重表現」の多用の問題

「スピーチ」は「手紙文」と比べ、比較的「直接尊重表現」の使用が多い傾向があった。文字数250字から500字の「手紙文」と「スピーチ」、各230用例を対象とし、「直接尊重表現」の数を調べた。

【表4】「手紙文」と「スピーチ」における「直接尊重表現」の品詞別使用様相

	「手紙文」(用例数：２３０)	「スピーチ」(用例数：２３０)
名詞	７１３[17]	９０５
動詞	１６０	１８８

「文話」―「手紙文」「スピーチ」の分量が変わると、「お・ご」を用いた「敬語表現」の数も変わるため、文字数250-300字程度の「手紙文」「スピーチ」を「直接尊重表現」の使用様相を調査対象とした。また、「文話」―「手紙文」「スピーチ」の内容や「表現主体」の言語的習慣などによる「敬語形式」の使用における変化という面は注意しなければならない問題であるため、本稿においては、そのような影響を最小化するため、あらゆる種類と内容の「手紙文」「スピーチ」を調査の対象とした。

その結果、「手紙文」より「スピーチ」のほうに「直接尊重表現」の使用が多いということが確認できた(【表4】参照)。特に「スピーチ」には名詞(動詞の連用形からの表現も含めて)における「お・ご」を用いた「直接尊重表現」の使用が「手紙文」と比べ、比較的多いことが確認できた。

名詞だけでなく動詞に関しても幅広く使用されている点が【表4】から確認できるが、それは「スピーチ」という表現形式にその理由があるのではないかと考えられる。「スピーチ」は「手紙文」と違って、「相手」と直接、面と向かって表現することをその表現形式としているため、その表現を聞いている「相手」、その表現に関係する「相手」が「表現主体」の目の前にいる。そのため、目の前にいる、その場で聞いている「相手」に対しての配慮、意識が働いて、このような傾向が見られるようになったのではないかと考えられる。

また「スピーチ」は、表現する内容のなかに、目の前にいる「相手」に直接関係することが多いという点も「お・ご」を用いた「直接尊重表現」の多用につながるのではないかと考えられる。

さらに「スピーチ」において「直接尊重表現」―【表4】で確認できるように名詞に「お・ご」をつけた名詞の「直接尊重表現」―が「手紙文」に比べ比較的多用されていることが確認できる。それは、上の4.2.3. **名詞の「直接尊重表現」としての使用様相に関する考察**の項目で確認したような意識が「手紙文」と比べ、比較的積極的に働いた結果ではないだろうか[18]。

5.2. 「間接尊重表現」の使用様相に関する分析・考察―「表現形式」の問題

「お・ご―申し上げる」「お・ご―いただく」を中心とした「間接尊重表現」における「表現形式」の問題について考える。「お・ご―申し上げる」「お・ご―いただく」のような「お・ご」を用いた「間接尊重表現」は、「―」の部分に動詞の連用形が入った「ひとまとまり」の「敬語形式」として存在しており、上で確認したように、「改まった場面」―「手紙文」「スピーチ」における「お・ご」を用いた「敬語表現」の使用の一部を担っている。

しかし、「スピーチ」におけるひとつの「敬語形式」として「申し上げる」「いただく」の前に「を」「に」などの助詞を入れた用例があった。次は「スピーチ」からの表現例である。

(28) 皆さま、本日はご多用のところ、父裕次郎の古希の祝いに、このようにお集まりくださり、厚く お礼 を 申し上げます。(「式辞」、p. 157)
(29) 清水様ご夫妻にあらためて お礼 を 申し上げます。(「新郎」、p. 72)
(30) 皆様にご報告いたしますとともに、あらためて お祝い を 申し上げます。(「あいさつ」、p. 192)
(31) 今日ここにめでたく成人式を迎えられた皆さんに、心より お祝い を 申し上げます。(「式辞」、p. 410)
(32) ご両家の皆さまにも心より お慶び を 申し上げます。(「式辞」、p. 51)
(33) 研究開発部を代表しまして、心から お喜び を 申し上げます。(「あいさつ」、p. 222)
(34) 遺族を代表いたしまして、謹んで皆さまに ごあいさつ を 申し上げます。(「葬儀」、p. 46)
(35) ひと言お礼の ごあいさつ を 申し上げます。(「新郎」、p. 86)
(36) 本日はこのようなめでたい席に お招き を いただき、たいへんうれしく思っております。(「大事典」、p. 120)
(37) 本日はお忙しいなか、たくさんの お集まり を いただき、まことにありがとうございます。「あいさつ」、p. 298)
(38) また、諸先輩からは何事にも お力添え を いただくという力強いおことばもありました。(「式辞」、p. 545)
(39) それ以来、私の結婚後の一時期を除いて、ずっと親しくしていただき、いまも家族ぐるみの お付き合い を いただいております。(「式辞」、p. 163)
(40) PTA活動の目的や意義に ご理解 を いただくとともに、前向きかつ積極的な ご協力 を いただきますよう、この場をお借りしてお願い申し上げます。(「あいさつ」、p. 281)
(41) きっとまたお目にかかって、 ご指導 を いただくこともあろうかと思います。(「式辞」、p. 391)
(42) このように大勢の方々に ご臨席 を いただき、まことにありがとうございます。(「新郎」、p. 72)

【その他】:「ご助力をいただく」「ご出席をいただく」「ご推薦をいただく」「ご厚誼をいただく」「ご愛顧をいただく」「ご支援をいただく」「ご出席をいただく」などの例がある。

「お・ご+動詞の連用形+申し上げる、いただく」の「敬語形式」で表現できるが、それを分離したような「敬語形式」の「お・ご名詞」+「助詞(を、に)」+「申し上げる、いただく」の「敬語形式」を用いている例である。このような「敬語表現」は主に「スピーチ」において確認され、「手紙文」においてはその使用数が非常に少なかった。つまり、「手紙文」においては「お・ご+動詞の連用形[19]+申し上げる、いただく」の「間接尊重表現形式」を用いて表現しているのに対し、同じ事柄を表現するのに「スピーチ」では「手紙文」とは異なる「敬語形式」を用いる場合があった。

本項目では、このような「スピーチ」における「お・ご名詞」+「助詞(を、に)」+「申し上げる、いただく」の「敬語形式」—「お・ご+動詞の連用形+申し上げる、いただく」のような「ひとまとまり」の「間接尊重表現」としても使用可能な表現について考える。

まず、「敬語形式」からの分析を行う。「申し上げる」の前に来る「お・ご名詞」は、内容（文脈）においては「自分」のことを述べる場合が多いので、「間接尊重表現」としての機能を持っていると言えよう。((28)～(35)を参照) 同じ観点から分析すると、「いただく」の前に来る「お・ご名詞」は、「相手」の動作や働きかけを表現する場合が多いので、「直接尊重表現」としての働きをしていると言える。((36)～(42)を参照) しかし、下の例で確認できるように、「ひとまとまり」の表現に戻した場合は、「申し上げる」と「いただく」の前に来る表現は、両方、「ひとまとまり」の「間接尊重表現」となる。このようなことは以下の表現例において確認できる。

(28) 皆さま、本日はご多用のところ、父裕次郎の古希の祝いに、このようにお集まりくださり、厚く[お礼] を 申し上げます。(「式辞」、p. 157)
⇒皆さま、本日はご多用のところ、父裕次郎の古希の祝いに、このようにお集まりくださり、厚く[お礼申し上げます]。

(34) 遺族を代表いたしまして、謹んで皆さまに[ごあいさつ] を 申し上げます。(「葬儀」、p. 46)
⇒遺族を代表いたしまして、謹んで皆さまに[ごあいさつ申し上げます]。(「葬儀」、p. 46)

(36) 本日はこのようなめでたい席に[お招き] を いただき、たいへんうれしく思っております。(「大事典」、p. 120)
⇒本日はこのようなめでたい席に[お招きいただき]、たいへんうれしく思っております。

(41) きっとまたお目にかかって、[ご指導] を いただくこともあろうかと思います。(「式辞」、p. 391)
⇒きっとまたお目にかかって、[ご指導いただく]こともあろうかと思います。

このような「敬語形式」は「スピーチ」全般に渡って使われていた。その使用に関する意識について考察した。

i)「文話」—「スピーチ」全体における「敬語レベル」調整の面

「お・ご—いただく、申し上げる」などの「お・ご」を用いた「ひとまとまり」の「敬語表現—間接尊重表現」は、比較的「敬度」の高い「お・ご」を用いた表現である上、動詞と一体化させた表現、比較的形式に充実した表現である。したがって、形式の面を重視する「手紙文」においては多用されるが、「手紙文」より形式の面における制約などが比較的少ない「スピーチ」においては、分離した形で使われていると考えられる。

また、「スピーチ」の全体の構成などを考慮し、全体的に重い、文章的な表現に偏ってしまうことを避けるため、「お・ご」と動詞の部分を分離した表現を使っているという面も考えられる。「文章」である「手紙文」と違って、「スピーチ」は「談話」という性質を持っているので、比較的形式から離れた表現、口語的表現を用いることによって「談話」としての性質を確保していると言えよう。つまり、形式から多少離れた表現を用いることにより、「スピーチ」という「談話」が「文章」のようになることや重苦しくなることを避けるという効果を得ているのではないかと考えられる。

ii）実質的な意味を表現

「お・ご—申し上げる、いただく」の「間接尊重表現」は上で述べたように形式的性質を持っている「敬語形式」であり、「ひとまとまり」で表現される「敬語形式」である。また、主に「敬語化」が目的としているのは「—」の部分に入る概念、つまり「—する（あいさつする、集まるなど）」の動作、状態であって、「申し上げる」「いただく」の概念は「敬語形式」において形式の面を担当しているという感覚がある。したがって、上で述べたように、比較的形式の面を重視する「手紙文」においては、「ひとまとまり」の「お・ご—申し上げる、いただく」のような「間接尊重表現」が多用されているのである。

一方、「スピーチ」における分離した表現は、「手紙文」の「ひとまとまり」の表現とは違い、実質的意味を持つようになると思われる。形式的印象の「お礼申し上げる」より、「お礼　を　申し上げる」のような分離した表現を用いることによって、「自分」の「意図」、感情である「お礼」「を」、「相手（あなた（方））」に「申し上げる」という実質的意味をより鮮明に出すようになるという効果があると思われる。特に、「申し上げる」のように、「言う、話す」などのような「通常語」より「丁寧な」、また「場」に相応しい形式的印象の持つ表現に実質的意味を付加することによって「スピーチ」における「丁寧さ」を確保していると言えよう。

また、「ご指導」「を」、「いただく」のような「分離」した「表現」も上の同様の観点で考えられるが、特に「お・ご—いただく」の場合は用例で確認できるようにその使用の幅が広かった。「お集まり」「お招き」「ご指導」「ご支援」などの例があるが、それは「いただく」という授受表現の持っている「丁寧な」感覚がその表現に反映された結果であると考えられる。

さらに、音声の媒体としている「スピーチ」の基本的性質から考えると、このような表現は「お・ご」の付いた表現（ことば）を強調する機能もあると考えられる。実際声を出して話す際、「お祝い」「を」「申し上げます」と言ったほうが、連続している「お祝い申し上げます」を言ったほうより、「お祝い」や「申し上げる」という表現をより鮮明に、あるいは、より効果的に伝えられるという意識が働いているのではないかと考えられる。

6. おわりに

以上、「手紙文」と「スピーチ」における「お・ご」を用いた「敬語表現」の使用様相について「直接尊重表現」と「間接尊重表現」を中心として考えてみた。「改まった場面」における「お・ご」を用いた「敬語表現」の使用様相に関する一部の分析、考察であるが、単なる「お・ご」の付け方の問題だけでなく、「お・ご」を用いた「敬語表現」が「手紙文」「スピーチ」においてどのような使用様相を表しているのか、また、その使用においてはどのような意識が働いているのかについて分析、考察を行なったことに、この研究の意義を置きたいと思う。

今回の分析、考察においては「文例集」「用例集」からの用例をテキストとし、主にその理想的使用実態について考えた。分析、考察した内容が実際の使用場面—日本語使用者（母語話者だけでなく、日本語学習者も含めて）の実際の使用—においてはどのように現

われるようになるのかという問題などが残っているが、それらは今後の課題としたいと思う。

注

[1]「改まった場面」は、「コミュニケーション主体」が「場」「人間関係」に対する総合的認識である「場面」において「丁寧に」、「改めて」認識した場合の総称である。「場」「人間関係」などだけでなく「媒体」の面においても「丁寧に」、「改めて」「表現」「理解」しようとする認識を持つ場合も含めて考える。「場面」の概念・用語は蒲谷（2003）から取り入れた。

[2] 蒲谷・川口・坂本（1998）「文話」は「文章」と「談話」の総称であるとしている。

[3] 市販の「手紙文文例集」は、いわゆる正式な「手紙文」だけでなく、略式の「手紙文」や業務関係の「手紙文」なども扱っているため、「手紙文」の規定をやや広めに捉えている。

[4]「スピーチ」においては「手紙文」のように比較的厳格に決まった形式はないと考えられる。もちろん、「スピーチ」の種類によって習慣的に使われる「決り文句」のような表現（例えば、結婚式の「スピーチ」においての「末長くお幸せに」など）はあるが、「手紙文」の形式みたいに「厳格に決まっている」とは言えないと考えられる。
ただし、「一般的なスピーチ」は次のような構成を持っていると考えられる。
はじめのあいさつ→核となる内容→終わりのあいさつ

[5]「音」「音声」による干渉を排除するためである。

[6]「表現主体」「表現意図」「相手」の記述は「文章」としての「手紙文」を分析、考察するために筆者が付けたものである。また「表現主体」「表現意図」「相手」の用語は、蒲谷・川口・坂本（1998）から取り入れた。「スピーチ」の場合も同様である。

[7] 用例における「お・ご」を用いた「敬語表現」全部に白い四角や網掛けの四角などを用いて表しているのではない。考察対象となる表現だけにマーキングしているのである。

[8]（　）を付けたのは「直接尊重表現」と「間接尊重表現」が用例のなかででつながった形で出現する場合とそうでない場合があるということを示している。

[9] 表の数字は次のような方式でカウントした。「なんとか$\boxed{\text{お心当たり}}$へ$\boxed{\text{ご紹介願えません}}$でしょうか」のような「文」が「手紙文」にある場合、名詞の「心当たり」に「お」を付けた「お心当たり」が「直接尊重表現」として使用されている。したがって、名詞の「直接尊重表現」の一つとしてカウントする。また、動詞の「紹介する」に「ご―願う」を用いた「ご紹介願えませんか」が「間接尊重表現」として使用されている場合、それを動詞の「間接尊重表現」の一つとしてカウントした。「スピーチ」の場合も同様である。数字は「表現」の数であって、「用例」の数ではない。

[10] 蒲谷・川口・坂本（1998）「行動展開表現」における「丁寧さ」の原理である。

[11] 蒲谷・川口・坂本（1998）「あたかも表現」の概念を取り入れた。

[12] 本稿においては「比較的」間接的であると認識している。本稿では、動詞が「―する（なる）」という概念を「比較的」直接的に表すのに対し、名詞は「―する（なる）」という概念を表すのに「比較的」間接的であると認識している。名詞は動詞のように動作・状態を「直接」表すのではなく、動作・状態に「名前」を付け、概念として表すため、同様の事柄を表す際、動詞に比べ、比較的「間接的」であると考えている。

[13] 白の他にも、窪田・池尾（1971）、大石・林（2000）による同様の指摘がある。

[14] 筆者の表現である。

[15] 林（1999）

[16] 菊地（1994）をもとに金（2003）はその制約と実際の指導について述べている。

[17] カウントのやり方は【表1,2】と同様。数字は「表現」の数であって、「用例」の数ではない。

[18]「手紙文」ではそのような意識が働かないという意味ではない。「スピーチ」では「手紙文」と比べ、比較的積極的に働いているのではないかということである。

[19] 同じ形であるが、ひとつの「表現形式」のなかで存在し、働く場合は「動詞の連用形」として、助詞によって分離された場合は独立した（独立して働く）と見なし、「名詞」として考えた。

〈参考文献〉

大石初太郎・林　四郎編（2000）『敬語の使い方』明治書院
蒲谷　宏・川口義一・坂本　恵（1998）『敬語表現』大修館書店
蒲谷　宏（2003）「「待遇コミュニケーション教育」の構想」『講座　日本語教育』第39分冊　早稲田大学日本語研究教育センター
菊地康人（1994）『敬語』角川書店
金　東奎（2003）「敬語接頭辞「お・ご」を用いた敬語化とその敬語表現に関する一考察」早稲田大学大学院日本語教育研究科修士論文
窪田富男・池尾スミ（1971）『日本語教育指導参考書2　待遇表現』文化庁
窪田富男（1992）『日本語教育指導参考書18　敬語教育の基本問題（下）』国立国語研究所
柴田　武（1957）「「お」が付く語・付かない語」『言語生活』7月号
田中章夫（1972）『現代の敬語とマナー』至文堂
辻村敏樹（1991）『敬語の用法　角川小辞典6』角川書店
――――（1992）『敬語論考』明治書院
林　四郎（1999）「敬語の役目はなくならない」『月刊言語』11月号
白　同善（1996）「日韓敬語動詞発達の要因に関する一考察」『日本語学』7月号
Brown. P. and Levinson. S.（1987）*Politeness: Some universals in language usage*, Cambridge University Press

〈「手紙文文例集」「スピーチ用例集」〉

現代文書研究会編（1990）『そのまま使える手紙の書き方全書』池田書店
講談社編（2001）『あいさつ・スピーチと手紙の事典』講談社
木庭久美子（1999）『すぐ書ける　お礼の手紙・はがきの手帳』小学館
主婦の友社編（2001）『CD－ROM付　手紙・はがき・文書文例大事典』主婦の友社
成美堂編集部（2001）『短いスピーチ大事典1000』成美社
永田書店編集部（1995）『すぐに使える　式辞・あいさつ実例百科』永田書店
藤村英和（1998）『葬儀・法要のあいさつ』西東社
ブライダルスピーチ研究会（1998）『新郎・新婦のスピーチ実例集』日本文芸社
輪辻　潔（1997）『すぐに役立つ大活字BOOK's　わかっているようでわからない手紙の書き方』三省堂出版社